
あの愛おいしい、平凡な日々

茅野春葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの愛おしい、平凡な日々

【Nコード】

N5990S

【作者名】

茅野春葵

【あらすじ】

ノドンにある一宿屋の娘メリナ。彼女は実家の家業を手伝いながらも他愛もない平凡な毎日を過ごしていた。退屈を感じる時はあるものの、宿屋に泊まる冒険者の話をたまに聞く、それだけで十分だった。刺激なんかいらぬ。何も無い日々が一番幸せな事なんだと彼女は常々思っていた。

カランコロソ。

お昼もかなり過ぎた頃。

銀色の鈍い光沢を放つ年季の入ったベルが、独特の甲高い音を辺りに鳴り響かせた。

私は慌てて休憩室から小走りで出ると、弾む息を軽い深呼吸でなんとか落ち着かせてから笑顔を浮かべる。そして受付カウンターへと続いているドアを静かに開けた。

「いらつしゃいませ！」

なるべく明るく元気よく挨拶をする。

だって、出迎えが暗かったり愛想がなかったら出迎えられる方もいい気分じゃないもの。

客商売なのに、愛想がないって致命的でしょ？

嘗て経験した事があるからこそ、それが如何に大事か痛感した事なんだけどね。

「お待たせしてすみませんでした」

謝罪も忘れない。実際お待たせしてしまったんだもの、当たり前よね。

「ようつ！ メリナ。元気にしてたか？」

「スレインさんっ！ お久しぶりです！」

受付で待っていた人は、うちの馴染み客となっている冒険者スレインさんだった。

それが王都の宿屋なら不思議に思わないんだけど、ここセシエガ王国の遙か西に位置する町、ノドンにある一宿屋ってなると結構凄い事だと思うよ。その宿屋の人間が思う事ではないけどもね。

スレインさんは十年程冒険者をしているらしいので、どこことなく風格いや、貫禄か？ がでているおじさん……っと、そこまでの年齢ではなかった筈なので訂正して、お兄さんだ。

首辺りで短めにざっくりと切った深緑の髪と同じ色の瞳で、その目は優しい色を湛えて私を見ている。

がっしりとした身体で日に焼けた肌は所々に古傷があり、冒険の歴史が肉体に刻み込まれていた。その身体から分かる通り剣士なものだから、傷の大小はあるだろうけどかなり多いと思う。大半は服に隠されて見えないけど。

とりあえず新しい傷は見える範囲にはない事をざっと確認すると内心でこっそりと安堵の息を吐いた。

冒険者に危険は付き物と分かっているけど、知り合いが怪我を負っていることやっぱり心配になる。それを彼らに言ったところで逆に気を遣わせるだけだから何も言わないけどね。

「とりあえず、四人。十日程宿泊できるか？」

「あ、はい。ちよつと待つてくださいね」

私はカウンター内にある宿帳を捲ると、空き部屋の確認をする。
んーと……。

「二人部屋が二つと一人部屋が一つの空きがありますけど、どうします？」

「そうだなあ……」

スレインさんは後ろにいる仲間チラリと一瞬だけ視線を移した。

「全部の部屋で頼む」

「全部の部屋、ですか？」

スレインさんを入れて四人なので通常は二人部屋の二部屋になるんだけど珍しいなと思っていたら、女性が一名いらっしやいました。一番後ろにいたからすぐには気付かなかったけど。

だったらそういうとり方しか出来ないよね。いやまあ、どういう部屋のとり方してもこちらから何か言う事はないんだけども。

「はい。二人部屋二つと一人部屋一つですね。期間は十日間がいいんですよね？」

「ああ、とりあえずは。延びるようならまたその時に言っさ」

「分かりました。ではこちらの宿帳に宿泊者全員のお名前のご記入をお願いします」

私は宿泊者名簿の今日のページを開くと、カウンターの上に置いた。そして羽ペンをスレインさんに渡す。

スレインさんはもう慣れたもので、そのまま受け取るとサラサラッと自分の名前を書いた。

何時見ても綺麗な字だ。

「ほら、一人一人ちゃんと自分で書けよ」

そう言って一番近くにいる人へ、羽ペンを渡そうとした。

しかし、その人 茶色の髪のお兄さんは中々羽ペンを受け取るうとはしなかった。

字を書くのが嫌なのかな……？ 今までそういう人もいたからお兄さんもそうなのかと思っていたのだけど、どうやら理由は違ったみたい。

「インクも付けずに書けるんですか？」

スレインさんの手にある羽ペンを不思議そうにじっと凝視している。

同じ見るなら自分で持って見たらいいのに。別に危険物でもなんでもないんだから。

「ん？ ああ、珍しいだろう。何せこの羽ペンは聖竜ゼミウムウルアより授けられた物らしいからな」

「ええっ！？ こ、この羽ペンが……っ！？」

「なんて勿体無い事をつ……！」

「マジかよ……」

いつの間にか残りの二人も近寄っていて、羽ペンを凝視していた。口々に何か色々と呼んでいただけ。

確かに人によれば『勿体無い』なんて事を思つかもしれない。

聖竜ゼミウムウルア。

世界の何処かにいると言われている七竜 竜の中でも特殊な七

頭の竜で聖竜・黒竜・炎竜・水竜・土竜・風竜・雷竜の事をさして

おり、その中の一竜の事だ。

七竜とは巨大な力を有している竜で、一竜だけで一つの国を消滅させる事が出来ると言われている。

でも実際、七竜が国を滅ぼしたという話は聞いた事もなかったし、どこにもそんな記録はなかった。ただ昔から『世界を壊したくなければ、七竜を怒らせてはいけない』と言われていただけなのだ。

もしかしたら遙か昔に誰かが七竜を怒らせてしまい、国を滅ぼされたのかもしれない。だからそういう言い伝えみたいなものだけが今でも細々と引き継がれているのでは？ と、私は思っている。研究者でもないから勝手に思っているだけなんだけどね。

七竜全てについて言える事だけど、研究している人物は現在もいるのに未だに詳しい事は何も分かっていないそうさ。

なにせその存在はある意味伝説級。よし、調べよう！ と言って簡単に調べる事なんか出来ない相手なのだ。それ以前に七竜の居場所を特定する事すら困難を極めているらしい。

そういった事情も相まって、七竜全てを見た者は未だにいない事から、本当に七竜いるのかと言われていている現状なんだけど、聖竜ゼミュームウルアに関してだけは間違いなく現存していると断言できた。

その聖竜ゼミュームウルアだが、彼の竜の出す試練に打ち勝てた者にはその者が欲する『物』を一度だけ与えてくれるという、なんとも太っ腹な竜だったりするのだ。それがどのような物だったとしても授けてくれるという話なのだから、凄いやというか何というか……。

なので、現存の確認もわりと簡単に出来たりする。何せ冒険者が『聖竜ゼミュームウルアから授けてもらった』と嬉々として周囲に報告しているからだ。

たまに虚偽もあるみたいだけど 虚偽の理由も分からない事はない。何せ『聖竜ゼミュームウルアの試練』を乗り越えたとなると、ある程度の実力はあるという証にもなるからだ。一種のステータス

扱いだ。

なので、彼らの驚き様は理解出来ない事もない。スレインさんだって初めて聞いた時には驚いていたし 彼らほどではなかったけどね。

普通なら絶対防御の盾とか斬れない物は何も無い剣とか 矛盾のある例えだけど、とにかく色々あると思う。

でもそんなのって冒険者だけが欲しいんだろっし、第一いつまでも冒険者なんて出来ないでしょ？ 年をとればとるほど冒険者業ほどしんどいものはないと思うしね。

「この羽ペンはおじいちゃんが貰った物なんです。おじいちゃん、付けインクで書くのが苦手で……。だから付けインクを使用しない、スラスラと書けるペンが欲しいとお願ひしたそうです」

「ええっと、間違いなく聖竜ゼミュームウルアに？」

やっぱり、信じられないのかもう一度念押しのように茶色の髪のお兄さんに聞かれた。

「はい。間違いなく。だってこの様なもの、私達では到底作れませんし、第一此処は背後に霊峰ウリクリスが聳え立っているんですよ？ ウリクリスと言えは……。分かりますよね？ いえ、それ以前に皆さんの目的だったのではないですか？」

そう、聖竜ゼミュームウルアはここノドンの背後にある霊峰ウリクリスを住処にしているのだ。

なので、彼らのような冒険者が時折ここにやってくる。そう、時折……。

なにせノドンは王都からかなり離れており、移動も容易ではないからだ。

「あ、うん。確かに俺達は、霊峰ウリクリスに住んでいる聖竜ゼミュームウルアの試練を受けに来ただけど……」

「君のおじいさんは、昔冒険者だった、とか？」

茶色の髪のお兄さんの言葉を引き継ぐように、今度は黒い髪の青いローブを着たお兄さんが話しかけてきた。その服装から考えると

魔術師なのかな？ そんな事を考えつつも答える。

「いいえ。おじいちゃんはずっとこの宿屋で働いていたそうなので、冒険者じゃなかったと思います」

「ふーん……そうなると、試練ってそれ程難しいわけじゃないのね」
今度はやけに色香の漂う紅一点、赤髪のお姉さんが話しかけてきた。

多分剣士だと思うけど、どうだろう。

服なんかじゃなくちよつとした鎧を着ているのに身体の線が綺麗に出ていて、拘りがあるんだなと一目で分かる。間違いなくオーダーメイドだ。そうじゃないとここまで綺麗に身体の線が出ないと思うし。

職業柄、冒険者の装備は結構見てきたから、なんとなくだけどわかるんだよね。素材とか価値は別にしてだけでも。

「あー、もうその辺にしてそろそろ部屋で落ち着かねえか？ 碌に休憩も取らず来た所為で疲れてるしよ。それにこれ以上メリナの仕事を邪魔しても悪いだろ？」

まだまだ続きそうだった質問を、スレインさんが間に入って止めてくれた。

実際これからやらなければいけない事があったので、どうやって話を打ち切ろうかと思っていたところだったから本当に助かったのだ。三人は渋々といった感じだったけど、羽ペンで名前を順番に書いてくれた。最後のお姉さんが書き終わったのを確認すると、私は宿帳を所定の位置に戻してそれぞれの部屋の鍵を取り出す。

「こちらがそれぞれの部屋の鍵です。二人部屋は左にある階段を上がっていたいただいた二階の左端の一つ目と二つ目。一人部屋は三階の右側の一番端になります」

部屋の場所の案内を口頭で伝え、スレインさんに鍵を渡すのと引き換えに十日分の宿代の半分を前金として受け取った。

「なあ。全額でなくていいのか？」

黒い髪のお兄さん　宿帳には確かシイドって書いてあったので

シイドさんだろう。が、少々驚いたように私とスレインさんを見ていた。

普通なら全額前払いが当たり前だったりするからそれに慣れている人はちよつと驚いたかもしれない。何時何かあるか分からないし、そのままお金を払わずに逃げる人がいるから全額前払い制が暗黙の了解となっていた。誰がやりだしたか今となつては分からないけど、そんな全額前払い制が当たり前の中で、うちは半分だけの前払い制だ。やっぱり驚くのも無理はないかもしれない。私もうち以外にやっているって聞いた事ないし。

別に全額前払いでもいいんだけど、『いきなりやり方が変わったらお客さんが困るだろう?』というおじいちゃんの言葉で、結局昔からの半額前払い制のままになっている。

でもやっぱり踏み倒される事もこんな田舎でもあったりしていたので、本当に困っていた。王都みたいにひっきりなしにお客さんがこない田舎では例え一泊でも死活問題だからね。でもやり方は変えたくない譲らないおじいちゃんにみんなはかなり困ったみたい。だから防衛策を講じる事にしたの。

それは本当の最終防衛策であるけど、これ以上にならない程最強のもので、今でも問題なく続けられている。

スレインさんがチラリと私に視線で『言ってもいいか?』と尋ねてきた。別に秘密ではないので問題はないんだけど、でもあまり大っぴらにしたくはない。知って得する事なんか何もなく、逆に微妙な気持ちになるのは間違いないと思う。

建前で言い逃れできるんだけど、じつと懇願するような瞳でシイドさんに見つめられて、思わず苦笑を浮かべてしまった。

そこまで必死になるようなものではないし、逆にどうしてそこまですると思ってしまう。自分で言うのも何だけど、だってたかだか宿屋の支払い方法だよ? それが一般的ではないからってどうしてそこを気にするのか……。

まさか商売敵の偵察っ!? なんてね、そんな事あるわけないか。

冒険者雇ってまでそんな面倒な事をする筈もないし、第一王都の有名宿屋ならいざ知らず、うちにわざわざ偵察なんてするわけないよね。仮にそうだったとしても、簡単に真似する事は出来ないと思っただけ。

自分で考えておきながらなんだか馬鹿らしくなったので、スレインさんに『どうぞ』と視線で了解を出した。

いや、自分で言っても良かったんだけど、なんだかスレインさんが言いたそうにしていたのでここはお任せする事にしたのだ。

「あんまり大きな声じゃ言えないんだがな……」

そう言っただけでシイドさんに近くへ寄って来いと手招きをした。

別にそこまでしなくてもいいのになんか思っていたら、素直にシイドさんも従っているし……。

何なんだろう、この使い古されている寸劇のようなやり取りは。外見によらずノリがいいんだね、シイドさんって。

「実はさっき書いたあの宿帳……あれも聖竜ゼミウムウルアから授けられた物なんだよ」

「えっ!?!? あ、アレが……!?!?」

うん、まあ普通は驚くよねー。見た目はどこにでもありそうな普通の宿帳だったし。

「シッ! 声大きいって」

「悪い……で、その効果は?」

「とんずらした奴からの料金回収」

「ん? よく分からないのだが……」

「だから、あの宿帳に名前を書いた奴が金も払わず逃げると、不足分を回収するらしい」

「どうやって?」

「さあ? 俺はちゃんと金を払っているからな。だから実際どうやって回収されているのかは知らないんだよ。メリナに聞いても分からないって言われたしな。なあ?」

「あ、はい。気が付いたらカウンターのの上に、名前の書いた紙と共

にお金が置いてあるんです」

嘘じゃない、本当の話。どういった仕組みなのかは全く分からな
いけど、そこはあれ。何せ聖竜ゼミウムウルアから授けられた物
ですから、人間にはきつと理解できない物なんだと最初っから割り
切っている。

「それ、本当に宿帳の効果なのか？」

「調べようがないのでなんとも。でもお金と紙の横には、その人が
記入した宿帳のページが開いてあるんですよ。しかもインクの色も
変わってますからそうじゃないかとみんなは思ってます」

「インクの色って？」

「ああ。逃亡した人が書いた宿帳の名前が勝手に赤色に変わってい
るんですよ。それを見ると『ああ、逃亡したんだな』って一発で分
かる仕組みになっていいます。それがお金が返済されると、イン
クの色が元の黒色に戻っているんですよ」

「ふん……」

なんて呟きながらシイドさんは宿帳が仕舞ってある場所を見てい
た。

これでもう会話は終わりかな？ と思っていたんだけど……。

「あの宿帳は誰が貰ったものなんだ？」

それ、気になるところなんだ。やっぱり冒険者だから？ 素直に
答えたらきつとまた色々と言われるんだろうな。でもこんな事で
嘘をつく必要はないし。うう、面倒くさい……。

「おばあちゃんが貰ったそうです」

「君のおばあさんは……」

「勿論冒険者なんかじゃないですし、至って普通の、極々平凡な宿
屋の人間ですっ！」

何か言われる前に先に言っちゃれ！ と思ったから最後がちよっ
とキツイ言い方になったかもしれない。いや、間違いなくキツイ口
調になってたんだと思う。だってシイドさんやスレインさんは勿論、
他の二人も驚いた顔をして私の方を見ていたんだもの。

「まあ、そのなんだ。あんまりそれ以上聞くのは控えるよ。メリナだつて困っているだろ？」

スレインさんが苦笑しつつ諷めてくれたけど……でも、そういうスレインさんだつて初めは質問攻めにしていたんだよね……あの時も相当困つたし。今ではいい思い出だとなつているけど。

でもあの時にはお兄ちゃんがいたから、途中で助けてくれてなんとか切り抜けられたんだけどね。そうじゃなかったら延々と話が續いていたと思う。

今回はどうやらお兄ちゃんの代わりにスレインさんが助けてくれるみたいだ。

「なら最後に一つだけいいか？」

最後ならいいかな？ と思つてとりあえず頷いた。

「メリナも既に貰つている、なんて事はないよな？ いや、流石に子供には試練は無理か……すまない。今のは聞き流してくれ」

あの、聞き流せと言われてもですね？ 聞き流す事が出来ない単語が聞こえてきたんですけど……？

「こ、子供って……。確かに私はスレインさん比べると子供かもしれませんが、シイドさんとはそれ程歳が離れていないとは思うんですけど？」

思わずピクリと引きつりそうになる頬を、気合で何とか止めて笑顔で答えた。途中で「その笑顔、怖いんだが……」つていうスレインさんの呟きや、お仲間のお姉さんの「なんか気温が急に下がった気がするんだけど……」という声が聞こえた気がしたけど、きつと気のせい。うん、絶対気のせいだ。

シイドさんは生暖かい視線を私に向けている。その視線すらも苛つくんですけど、どうしてでしょうね？

「俺とそれ程変わらないって？ 大人振りたい気持ちも分からないではないが、別に無理に背伸びをする必要はないと思うけどな。十三歳ぐらいだろ？ その歳で働いているのは逆に凄い事だと誇つてもいいと思うけどな」

多分シイドさんは褒めてくれているんだと思う。いや、間違いなく彼の中では褒めているんだろう。でも、全く嬉しくない。

確かに、身長はちょっと低いかもしれない。シイドさんと比べたら悲しい事に、頭一つ分は低かった。

背中の中ごろまである髪が邪魔になるからとツインテールをしているのもいけないかもしれない。もしかしたらピンク色の髪というのも一因かもしれない。

でもね……。

「だからって十三歳って酷くないですかっ！？ 身長からですか！？ それとも髪形ですかっ！？ ねえっ！？」

思わずむんずとシイドさんの胸倉を掴み、抗議の意味を込めて前後へと揺さぶった。

「あー。とりあえずメリナ落ち着け、な？」

やんわりとスレインさんが私の手を解こうとする。

落ち着けですって！？ これでも十分落ち着いてますっ！

ともすれば叫びそうになる気持ちを視線に込めて、ギンツとスレインさんを見る。

そしてなんだか腹立たしくなってきたので、簡単に外されないようにギュツと掴む手に力を込めた。

「ぐえっ……」

ん？ 蛙？ まさかこんな所にいるわけないし、気のせいだよな。「ええつと、メリナさんでしたわよね？ 申し訳ないけどその手を離していただけないかしら？ シイドがもうそろそろ落ちそうなのよ」

苦笑を浮かべながらやんわりと告げるお仲間のお姉さんの声に導かれるように視線をそろそろと動かすと、そこには顔面蒼白のシイドさんがいた。

顔面蒼白というか、何処かへ旅立つ一歩手前？

「って！？ ああああ、あのごめんなさい！ 大丈夫ですか！？」
意識があるか確認しようとして前後に数回揺さぶった。

シイドさんは抵抗する事すら忘れたのか、ガツクンガツクンと揺れに合わせて頭を前後に動かしている。

「ちよっ!?! 頼むからそれ以上は止めてあげてっ!」

半ば悲鳴のように、茶色の髪のお兄さんが叫んだ。

そのあまりの叫び声に思わず揺さぶっていた手を止めると、すかさずスレインさんが私の手をシイドさんの服から離れた。

「…………ツ! ゲホッ、ゴツゴホッ!」

途端咳き込むシイドさん。その苦しそうな咳声や様子に罪悪感がちよっとなんて芽生えた。

あー。ちよつとやりすぎたかなあ…………。いや、でも仮にも冒険者だし、あれぐらい大丈夫…………だよな?

「すみませんでした。その…………大丈夫ですか?」

「あ…………。死ぬかと思った…………」

シイドさんはゴホンツと数回咳をしたりたまに「あー」とか小さく声を出している。どうやら喉の調子を確認しているらしい。

「ちよつと大げさすぎるんじゃないの?」

私もお姉さんの意見に激しく同意します。

女の子に胸倉掴まれて、ちよつと揺さぶられたぐらいで『死にそう』ってどれだけひ弱なのよ! って思う。どうせ意趣返しのもりなんだろうけど。

「冗談なんかじゃなく、本気なんだが…………。途中で死んだ爺さんに会って会話までしたんだぞ!」

「流石にそれはちよつと…………言いつつだと思っけどな」

シイドさんのとんでもない発言に、お兄さんは上手い返しを思いつかなかったのか苦笑を浮かべる。

「なっ!?! 俺が嘘をついているとでも言うのか!?! 仲間の言う事が信じられないと!?!」

「そんなに必死に言う事でもないでしょ? ロツシュだつて返答に困るじゃない」

本気に取ってもらえなかったのが余程気に食わなかったのか、お

兄さん　　ロツシュさんに詰め寄っていたシイドさんなんだけど、お姉さんの言葉にターゲットを変えたらしい。

「リリア……。前から思っていたが、俺の事嫌いだろ？」

「はあつ？　何よ行き成り変な事言い出して」

ムツとした表情を浮かべて片眉を上げるお姉さん　　リリアさん。
器用だなあ、なんて話の内容に関係ない事を思ってしまう。

「魔術師は体力がない、お荷物だと散々言ってたよな」

「どうしたんだよ、シイド？　ちよつと落ち着こう、な？」

ロツシュさんが落ち着かせようとシイドさんの肩に手を置いた。
瞬間、振り払われる。

うわー。シイドさんかなりご立腹？　ロツシュさんはロツシュさんで振り払われると思っていなかったのか、振り払われて行き場のない自分の手を呆然と見ているし。

その事によつて今度はリリアさんの怒りのボルテージが上がったらしい。腕を組んで威圧感を出してる。つて出してる！？

もしかしなくても、剣士スキルの『威圧』が発動しているんじゃないだろうか……。絶対そうだ。明らかに秀囲気おかししいし。

しかし、この喧嘩？　仲間割れ？　にスキル発動して……。頼むから攻撃系のスキルや魔術だけは使わないで欲しい。使うとしても場所だけは選んで欲しい、切実に。

それにしても……。と、私は横にまるで傍観者然として立っているスレインさんへ視線を移す。それだけで私が何が言いたいのかわかったのか、軽くため息を一つ吐いた。

「まあ、いいんじゃないの？　どうせそのうちやるだろうとは思っていたしな。それが試練中でなかっただけマシさ」

「止める気はないんですね？」

「ああ。部外者がここでしゃしゃり出たって何もいい事にはならないからな」

「部外者って……。今回も案内役って事ですか？」

「勿論。俺はソロでやる方が性に合っているんだよ」

そう言つてスレインさんは、心配するなとでも言つのように私の頭を数回、軽く叩いた。

むっ。だから子供扱いは……って、まあいいや。目の前で喧嘩なんかやられていると怒る気も失せてくるし。

「こいつらの事は気にせず、仕事に戻っていいぞ？ やる事いっぱいあるんだろ？」

確かに、仕事はまだ沢山ある。でも、ここで彼らを放置していてもいいのだろうか……？

「そうそう、ここは気にせず僕と遊ぼうよ。メリナお姉ちゃん」

突如聞こえた声に視線を動かせば、いつの間に来たのだろうか。

入り口に黒髪黒目の五歳位の男の子 近所に住むルーエン君が立っていた。

ルーエン君は自分の存在に漸く気付いてもらえた事が嬉しかったのか、ニコリと笑顔を浮かべるとトトトツと走り寄つて来る。

「もう！ お姉ちゃんったら、全然僕の事気付いてくれなかったからどうしようかと思つたんだよー？」

ちよつと剥れた顔をして抗議の声を上げるルーエン君を不思議そうに見ているスレインさんに、近所に住む子なんですと軽く説明する。

「メリナ。こつちは俺が何とかするから坊主と遊んでやるなり、仕事に戻るなりしろ」

「でも……」

「そつだよお姉ちゃん。おじさんが折角言つてくれてるんだから僕と遊ぼうよー！」

ルーエン君は私の手をギュツと握ると、瞳をウルウルと潤ませながら懇願する。

流石に子供にそんな事をされると拒む事なんか出来ない。でも、あのまま放置するのも……。

シイドさん達は相変わらず険悪なままだ。いや、事態はもっと悪くなつてきている気がする。雰囲気が一触即発、そんな感じだった。

「メリナお姉ちゃん……」

泣く一歩手前の声で呼ばれて、ぐらぐらと揺れていた私の心は決まった。

「そうね。お姉ちゃん仕事はまだちょっとあるから、それが片付いたら一緒に遊ぼうか」

瞬間、ルーエン君の顔がパアツと明るくなる。そんなに喜んでくると、こっちも嬉しくなってくる。

「それじゃあ、スレインさん。すみませんが後お願いします」

「元々メリナが気にする事じゃないんだ。ほら、行って来い」

笑顔で背中を押され、申し訳なく思いながらも私はその場を後にした。

隣にはニコニコと笑顔を浮かべているルーエン君がいて、私の手を放さない様にギュツと握っている。

きつと何の遊びをしようかと考えて、今から楽しみにしているのだろう。

「しっかし、あの坊主一体何時の間に来ていたんだ？」

そんなスレインさんの呟きが微かに聞こえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5990s/>

あの愛おしい、平凡な日々

2011年4月20日01時26分発行